

『白雲山記』 訳註稿

堀 口 育 男

凡 例

- 一、本稿は、節山板倉勝明撰「白雲山記」(本多忠升撰「白雲山記序」を含む)に就いて、これを訓読し、語釈を施し、併せて口語による通釈を試みたものである。なお「白雲山記」の概要に就いては、拙稿「板倉節山『白雲山記』に就いて」(『群馬文化』第二百二十九号 平成四年一月)を参照して頂きたい。
- 一、本文は、静嘉堂文庫所蔵「白雲山記 東還紀行」に拠る。同本の書誌的事項に就いては、右拙稿に略述した。
- 一、本文の章段分けと標題、及び改行は私意に由る。
- 一、本文の句点は底本に従う。
- 一、本文の用字は大むね通行の字体に従い、異体字等を改めたものがある。
- 一、誤写と判断される字句に就いては、これを改め、その旨を語釈の中に註記した。
- 一、底本には返点、附訓等は附されていない。従って、訓読は全く私意に由る。
- 一、語釈の中に引用した、平沢旭山、安積良斎の文は、本作品に先行し、従って、その影響の可能性の考えられるものである。
- 一、本稿は、もとより試解、試訳的なものである。不備な点に就き、博雅の御示教を頂ければ幸甚である。

白雲山記序

白雲山記序

節山板倉侯登白雲山。筆其游記。示予使序焉。展而讀之。娓娓數千言。極險峭壁奇々怪々之状。使人神馳心飛。若足踐其境。嗚呼侯何以能文至于此也。聞侯數年前加衛阪城也。聘小竹篠翁。講經學文。其東西往還。皆著紀行。而復作此游記。可謂不負其所學矣。因憶予往歲阪城加衛之日。亦延翁講習。然賦性鈍劣。毫無所得。至今兀々猶故吾也。讀侯此記。得不愧且羨哉。

抑山之險峭。非東道岐岨可輿馬往來之比。侯能不憚鍊鎖魚貫之勞。艱窘登降。悉到而無遺。使奇恠之勝堙没于世者。因文而顯焉。則侯之擢人材問民瘼。小大無遺。亦必如此記也可望矣。予之所愧且羨。不獨在文也。於是乎序。天保丁酉冬日。神戸藤忠升撰。

〔訓読〕

白雲山記の序

節山板倉侯、白雲山に登り、其の游記を筆にし、予に示して焉これに序せしむ。展のべて之れを読めば、娓娓として數千言、險峭壁奇々怪々の状を極め、人をして神馳せ心飛び、足其の境を踐ふむが若くならしむ。嗚呼、侯、何を以てか文を能くすること此に至るや。聞くならず、侯、數年前阪城に加衛するや、小竹篠翁を聘し、經を講じ文を学ぶ。其の東西往還には、皆紀行を著はす。而して復た此の游記を作る。其の学ぶ所そむに負かずと謂ふべし。因りて憶ふに、予往歲阪城加衛の日、亦た翁を延きて講習す。然れども賦性鈍劣にして、毫も得る所無かりき。今に至るも兀々として猶ほ故もとの吾なり。侯の此の記を讀みて、愧ぢ且つ羨まざるを得んや。

抑、山の峻峭なる、東道岐岨の輿馬して往来すべきの比に非ず。侯、能く鍊鎖魚貫の勞を憚らず、艱窘登降し、悉く到りて遺すこと無し。奇恠の勝の世に埋没せる者をして、文に困りて焉を顕はれしむ。則ち侯の人材を擢き、民瘼を問ひ、小大遺すこと無きも、亦た必ず此の記の如くなるや望むべし。予の愧ぢ且つ羨む所、独り文に在るのみならずるなり。是に於いてか序す。天保丁酉冬日。神戸の藤忠升撰す。

〔語釈〕

○節山板倉侯 板倉勝明。節山はその号。○白雲山 妙義山の古名。また、金鷄山、金洞山と共に、表妙義を構成する一峰の名。○媿々 ながぐしいさま。「白雲山記」は、漢文游記の一篇としては、かなり分量がある方だと言えよう。○險巖 けわしくあやういさま。○峭壁 壁のようにけわしくそばだったがけ。○加衛阪城 阪城は大坂城。加衛阪城とは、大坂加番を務めること。節山は天保五年及び同十年の二回、加番に任じられているが、こゝでは勿論前度のものを指す。○聘 まねく。○小竹篠翁 篠崎小竹。名は弼。小竹はその号。難波の儒者。著に『小竹斎詩抄』『小竹斎文稿』などがある。嘉永四年五月八日没。七十一歳。○其東西往還 天保五年大坂加番の為、江戸より中山道を西上した時の紀行に『西征紀行』があり、翌六年役を終えて東海道を経て帰府した時の紀行に『東還紀行』がある。○予往歳 序文の撰者本多忠升は文政三年大坂加番代に任じられている。○延 まねく。○賦性 生れつき。○兀々 心を一方に注いで動かぬさま。勤苦するさま。韓愈「進学解」に「焚膏油以繼晷、恒兀々以窮年。」とある。但し、こゝでは依然として、位の意か。○記 底本「記」に作るのを、誤字とみて改めた。○峻峭 高くけわしい。○東道 東への道。あずま路。○岐岨 信濃国の地名。木曾。○鍊鎖魚貫 鉄のくさりにつかまり、また、魚をつらねて串に差したように列を成して行くこと。『魏志』「鄧艾伝」に「將士皆攀木縁崖、魚貫而進。」とある。○艱窘 なやみくるしむ。○民瘼 民の難儀。瘼は病いの義で、比喩的に言う。このあたり、為

政を本分とし、善政に努める、当時の藩主たちの心がけが窺われる。○天保丁酉 天保八年。○神戸藤忠升 伊勢国神戸藩（一万五千石）の藩主本多忠升。本姓藤原。猗蘭本多忠統より五代目に当る。古賀精里の高弟で、『精里三集文藁』の序文や精里の墓誌銘を撰している。安政六年八月二十二日没。六十九歳。（節山より十八歳の年長。）

〔通釈〕

白雲山記の序

節山板倉侯は、白雲山に登って、その時の遊記を作り、私にそれを示して、序文を書いてくれ、と言う。広げて読んでみると、長々と数千字を連ね、山が険しくそばだつて奇々怪々な様子を描き尽し、読む者の魂が飛んで行って、あたかも、自分の足がその地を踏んでいるかのように思わせる（程素晴らしいものである）。あ、板倉侯は、一体、どういうわけで、これ程までに文章が上手なのであろうか。聞くところによると、板倉侯は、数年前、大坂城の加番を勤めていた時、篠崎小竹翁を召して、経書を講究し文章を学んだとのこと。また、東西の往還に際しては、いつも紀行文を著わしている。そして、今また、この遊記を作った。これは、その学んだことにもとらないものであると言うことが出来よう。それにつけても思うのだが、私が、以前、大坂城の加番代であった時、私もまた、小竹翁を呼んで学問を習った。しかし、生れつき才能に乏しく、少しも得るところが無かった。今に至っても、相変わらず昔の自分と同じであつて、少しの進歩もない。板倉侯のこの遊記を読んで、恥かしく、また、羨ましく思わないでいられうか。

そもく、白雲山の険しいこと、言つたら、東路あずまじの木曾が、（いくら険しいといつても）駕籠や馬に乗って行き来することが出来るのとは、比べものにならない。板倉侯は、鉄の鎖を伝い、魚を串刺しにしたように列をなして山路を進む、といった苦勞をもちとわず、苦しみなやみつ、登降し、全山をあまねく踏破して、取り残したところとて無い。

奇怪な景勝で、世間には知られずに埋もれていたものを、文章によって広く世に知らしめた。とすれば、板倉侯が人材を抜擢し、領民の苦しみを尋ね、小事も大事も取り残すことがないのも、やはり、また、きっと此の遊記と同様であることは、期待してよからう。私が恥かしく思い、また羨ましく思っているのは、たゞ文章のことだけではないのである。そんなわけでこの序文を書いた。天保丁酉（八年）の冬。神戸藩主藤原（本多）忠升が撰述した。

白雲山記

一、出発まで

白雲山記

甘雨亭主人著

丙申暮春。予自江戸還安中城。々々四遠皆山。把酒書堂。拳頭一望。浅岳帶雪聳天。其巔煙蒸。土人常以卜晴雨、東則晴。西則雨也。其他白雲金鷄金洞諸峯競秀。形如筆架。已而日没白雲山。餘暉猶在峯。先考每愛此山。取以為号。有詩文矣。余亦夢寐此山。欲探其奇。嘗在江戸請官得允。

〔訓読〕

白雲山記

甘雨亭主人著

丙申暮春、予江戸より安中城に還る。城の四遠皆山なり。酒を書堂に把り、頭を挙げて一望すれば、浅岳雪を帯びて天に聳ゆ。其の巔煙蒸す。土人常に以て晴雨を卜す。東すれば則ち晴れ、西すれば則ち雨ふるなり。其の他、白雲・金鷄・金洞の諸峯、秀を競ふ。形筆架の如し。已にして日白雲山に没す。余暉猶ほ峯に在り。先考毎に此の山を愛す。

取りて以て号と為し、詩文有り。余も亦た此の山を夢寐し、其の奇を探らんと欲す。嘗て江戸に在りて、官に請ひて允を得たり。

〔語釈〕

○甘雨亭主人 節山板倉勝明のこと。甘雨亭は、節山の書齋の名。○丙申 天保七年。節山廿八歳。○安中城 上野国碓氷郡（現安中市）に在った、節山の居城。○四遠皆山 歐陽脩「醉翁亭記」に「環滁皆山也。」とあるのを強く意識していよう。○浅岳 浅間山。活火山なので噴煙がたなびく。○晴雨 この下の点は朱。○白雲金鷄金洞 諸峯 白雲山、金鷄山、金洞山は、表妙義を構成する三主峰。○形如筆架 筆架はふでかけ。安積良齋「東省日録」に「遙見妙義山如筆格。」とある。○余暉 残照。○先考 亡くなった父。こゝでは節山の父板倉勝尚を指す。勝尚は、綽山、裕山堂主人の他、白雲山人とも号した。著に『綽山吟草』『水雲問答』（林述齋との問答集）がある。文政三年八月廿六日没。（節山十二歳の時。）○有詩文 『綽山吟草』卷二には「思白雲山十絶」を収める。その第七に「失脚黄塵転強顔 平生夢寐白雲山 臥聽蕉雨江城裏 心在千巖萬壑間。」とある。○亦 綽山の詩をふまえ、父と同じく私もまた、の意。○夢寐 ゆめに見る。○官 幕府。○允 ゆるし。許可。

〔通釈〕

白雲山記

甘雨亭主人著

丙申の年（天保七年）の暮春、私は江戸から安中城へ帰った。城の四方遙かなあたりは全て山である。書齋で酒を酌み、ふり仰いで一望すると、浅間山は雪を帯びて天に聳え立っている。その頂上からは煙がたち上っている。土地の者は、いつもその煙で天気を占っている。東にたなびけば晴れるし、西にたなびけば雨が降るのだ。その他、白雲山、

金鷄山、金洞山といった妙義連山の諸峯が、その秀でた姿を競っている。その形は筆かけのようだ。もはや、日は山のかなたに沈んでしまい、残照ばかりがまだ峯に残っている。今はなき父上はいつもこの山を愛でられ、山の名をとつて、自分の号となされ、また、白雲山のことを詩や文章に作られた。私も、また、この山を夢に見て、その奇勝を探訪しようと思った。以前、江戸に居た時、幕府にそのことを願ひ出て許可を得た。

二、出発、妙義権現参拝

四月十又二日。拂曉鞭馬至松井田驛。先瞻其峯於郵亭。山腹有皎若一隻鷲者。聞是聚幣數千。以作一大字形。其大三丈許云。蓋裁紙挿片頭。以作神主。俗謂之幣。自驛左轉渡一橋。曰中瀬橋。碓氷川清湍。聒吠水韻相和。隴麥瓦々。天鷄鳴空。行十許里。而上坂入黒門。々中有客店數十。香火之盛可知也。登石磴過二王門。右則殿閣也。又拳石階凡三層。置妙義權現祠。故亦謂此山曰妙義山。

小窓閑語曰。花山院内府光秀避乱于此山。後号妙喜。當時稱其才学。比法性房尊意。卒建祠於此。今誤為尊意之靈云。光秀不知何代人。又不知避何乱也。南朝花山院右大將長親性嗜文学。後薙髮号明魏。不詳其所終。世傳沉淪野州而終。或即是歟。果信然耶。今稱妙義。以國音相近誤耳。

右有波古曾神祠。延喜式所載白雲山祠是也。而今衰微。妙義祠獨盛。猶田氏之於齊乎。其傍小祠許多。降階數十級。置護摩堂千手觀音堂。左折降坂。憇吉澤亭。幽竹娟々繞亭。傾酒數杯。

〔訓読〕

四月十又二日、払曉馬に鞭うちて松井田驛に至る。先づ其の峯を郵亭に瞻る。山腹に皎として一隻の鷲の若くなる者有り。聞くならく、是れ、幣數千を聚め、以て一大字形を作る。其の大きき三丈許りと云ふ。蓋し紙を裁ちて片頭に

挿し、以て神主と作す。俗に之れを幣と謂ふ。駅より左に転じて一橋を渡る。中瀬橋と曰ふ。碓氷川の清湍、鼈吠水韻相和す。隴麦芴々として、天鷄空に鳴く。行くこと十許里にして、坂を上り黒門に入る。門の中、客店数十有り。香火の盛んなること知るべきなり。石磴を登りて二王門を過ぐ。右すれば則ち殿閣なり。又た石階を挙がること凡そ三層、妙義権現の祠を置く。故に亦た此の山を謂ひて妙義山と曰ふ。

小窓閑語に曰はく、花山院内府光秀、乱を此の山に避け、後に妙喜と号す。當時其の才学を稱して法性房尊意に比す。卒して祠を此に建つ。今誤りて尊意の靈と為すと云ふ。光秀は何れの代の人なるかを知らず。又た、何れの乱を避けしかを知らざるなり。南朝の花山院右大将長親、性文学を嗜む。後に薙髮して明魏と号し、其の終る所を詳かにせず。世に伝ふ、野州に沉淪して終ると。或は即ち是れか、と。果して信に然らんか。今妙義と称するは、国音相近きを以て誤れるのみ。

右に波古曾神の祠有り。延喜式に載する所の白雲山の祠とは是れなり。而して今衰微し、妙義祠のみ独り盛んなり。猶ほ田氏の齊に於けるがごときか。其の傍らに小祠許多あり。階を降ること数十級、護摩堂、千手観音堂を置く。左に折れて坂を降り、吉沢亭に憩ふ。幽竹娟々として亭を繞る。酒を傾くること数杯。

〔語釈〕

○払暁 あかつき。○松井田駅 松井田宿。中山道の宿駅。碓氷郡内。○瞻 望み見る。○郵亭 宿場。○皎 しろい。○聚幣数千云々 所謂「大の字」。『妙義山名勝案内』に「大の字は巖石の突出したる上の五六坪ほど平かなるほりに木を以て「大」の字の形を造りこれに注連繩を張り半紙を三角に疊みてさしこみしものなり」とある。現在では、板を白く塗ったものになっている。○井頭 木ぎれの先端。底本では「井」を朱にて見せ消ちになっているが、その必要はない。○神主 儒家で、死者の官位・姓名を書いて祠堂に安置する靈牌。○清湍 清らかな早瀬。

○喞吠 かえるの鳴声。○水韻 川のせ、らぎ。○隴麦 麦畑の麦。○芄々 草木が美しく茂っているさま。『詩經』鄘風「載馳」に「我行其野、芄々其麦。」とある。○天鷄 ひばり。底本「天戮」に作るのを、誤字とみて改めた。○行十許里 一里は六町である。(卅六町ではない。)このあたり、平沢旭山「登金洞山記」には「行十数里、忽得一大路、忽得一大門、々中有街、開店待客、此山香火之盛可知矣、」とある。○黒門 妙義権現の北門。黒塗りであるために言う。こゝが表参道に当る。○香火之盛 社寺などに参詣客の多いことを言う。○二王門 惣門。当時の妙義権現の様子は『木曾路名所図会』(文化二年刊)卷之四につぶさである。一王門に就いては、「惣門」として、「額高顕院 二王を安す」とある。○殿閣 別当石塔寺の本坊。石塔寺は東叡山輪王寺宮の隠居所であり、俗に宮様御殿と言う。当時の建物は、嘉永年間、火災に罹つて焼失し、現在の晨光閣は嘉永五年に再建したもの。○妙義権現祠 『木曾路名所図会』には、「本社妙義大権現」として「社殿美麗也、鰐口を掛る」とある。現在の妙義神社本殿。○小窓閑語 鈴木忠侯著。寛政二年刊。同書卷之二(三十八)に、「上野国白雲山妙喜法師の事、いづれの帝の御時にや、華山の院内府光秀卿といふ人、乱世をさけて白雲山の辺に來り、後に妙喜と改む、和漢の才に秀て、上古の菅原道真公にもまさり給へば、道真公の御師法性坊尊意と申べしと、時の人称しける、薨じ給ひて、白雲山に社を建て妙喜社といふ、時世おしうつり、光秀卿の事とりうしなひ、法性坊尊意の靈といふと云々、按るに、花山の院内府光秀といふ人、旧記に所見なし、南朝の花山の院右近衛大将長親、薙髮して明魏といふ、学才あり、此人を妙喜と誤れるなるべし、明魏薨じ玉ふ事、書に見えず、想ふに、漂泊して野々に來り玉ひ、そこにて終り給ふを、白雲山波古曾の神社の辺に葬り、明魏のやしろといふなるべし、云々」とある。○比 なぞらえる。○法性房尊意 平安時代中期の僧。第十三世天台座主。大僧都。天慶三年二月廿四日没。七十五歳。○花山院右大将長親 南北朝・室町時代の学者・歌人。藤原姓。法名明魏。耕雲と号す。初め南朝に仕えたが、後漂泊流浪。晩年には足利將軍や大内氏

の知遇を得た。著作に『耕雲千首』『耕雲口伝』などがある。正長二年七月十日、南禅寺の塔頭耕雲庵で没したと推定されている。○薙髪 剃髪。○世伝 『小窓閑語』では「想ふに」となっている。従って「沉淪野州而終」は鈴木忠侯の想像である。○野州 普通には下野国のことであるが、こゝでは上野国を指している。○国音相近 国音は華音に対して、わが国での漢字音をいう。明魏はミヤウギであり、妙義はメウギである。華音では、明は眉兵切、魏は虞貴切であるのに対し、妙は弥笑切、義は宜寄切であつて、近いとは言えない。○右有波古曾神祠 波古曾社は妙義権現本殿の向つて右奥に在った。(現在とは位置が異なる。)波古曾神社は『三代実録』にその名の見える古社である。橘三喜『一宮巡詣記』下巻に「法性坊の堂正面にあり、名社ナコソの神社は右の方にすへなをし、今は末社のごとく成ぬ、郷の者共云けるは、此社昔は正面にありぬ、今は借屋かして母屋とらる、清水の地主のごとし、」とある。(「名社」は「波己曾」の誤りであろう。)○延喜式所載云々 『延喜式』神名帳には白雲山祠の名は見えない。節山の思い違いか。○田氏之於斉 斉は太公望呂尚が営邱に封ぜられたのに始まる旧国であつたが、後、陳より亡命してきた田氏に、その政権を奪われた。○吉沢亭 未詳。料亭の如き店の名か。○幽竹 奥深くしずかに茂つた竹。○娟々 美しく清らかなさま。

〔通釈〕

四月十二日の払暁あかつき、馬に鞭を当て、松井田宿に着いた。先ずその峯の様子を宿場から眺めると、山腹に白く、一羽の鷺に似たものがある。聞くところによると、これは、幣帛を数千枚集めて「大」の字の形を作つたものであり、その大きさは三丈程だとのこと。思うに、紙を切つて木ぎれにはさみ、これを神霊の宿るものとするのである。世間ではこれを「幣」と言っている。宿場から左に折れて一つの橋を渡つた。橋の名は、中瀬橋である。碓氷川の清らかな早瀬では、かえるの鳴き声と水のせ、らぎが響き合い、畑では麦が伸びて、ひばりが空高くさえぎっている。十里ほど

行き、坂を上つて黒門を入つた。門の中には高い屋が数十軒も立ち並んでいる。参詣客の多いことは、これによつて知られよう。石段を上つて二王門を通り過ぎる。右に行けば殿閣である。更に石段を三層程上ると、妙義権現の祠がある。この為、この山を、また、妙義山ともいう。

『小窓閑語』には、「花山院内府光秀という人が、戦乱を避けてこの山に来て、後に、妙喜と号した。当時、その才学を称賛して法性房尊意になぞらえた。死後、その霊を祀る祠をこの地に建立したが、今では誤つて、尊意の霊を祀るものになつてしまつた、ということだ。光秀は何時代の人なのか分らないし、また、何の戦乱を避けたのかも分らない。南朝の花山院右大将長親は、生れつき文学を好み、後に剃髪して明魏と号した。しかし、その終焉の地がはっきりしない。世間では、落ちぶれて野州で死んだ、とも言ひ伝えている。もしかしたら、この人のことであろうか。」とある。果して本当にそうならば、現在、妙義と称しているのは、(妙義と明魏との)わが国での発音が近いために誤つたまでのことである。

右に波古曾神の祠が有る。『延喜式』に載っている「白雲山の祠」とは、これである。しかし、今は衰微してしまつて、妙義祠ばかりが盛んである。これは、丁度、齊の国に於ける田氏のようなものであるうか。その傍らには、小さな祠が沢山有る。石段を数十段下つたところに、護摩堂と千手観音堂とがある。左に折れて坂を下り、吉沢亭で休憩した。奥深く茂つた竹むらが、清らかに亭を取りまいてゐる。こゝで、酒を数杯傾けた。

三、金洞山登攀

又上金洞山。俗号中嶽。蓋白雲山之中嶽也。十有餘里間。群峯層崑。屈曲羊腸。路窄不可並行。細泉競流。其声戛玉。度溪橋。遙望嵌空。形似半月。過諸戸村。小幡侯封邑也。為予掃路。設一小亭乃憩焉。至鳥居下。古者立中嶽華表于

此、因為地名云。蓋我邦神祠。皆置華表。俗謂之鳥居。遙望東南。峯々聯互如波濤。瞰松井田驛於目下。回瞻則荒舟山。其形如搏風。故一曰搏風山。或曰長棟。是毛信之界也。為甲者誤矣。

步到嵩高寺。拜日本武尊祠。詣大黒天祠。及僧長清之墓。西拳屨屨數十仞。欲雲歎霧。如在半天。巔有天狗祠。蓋我邦所謂天狗者。猶彼中所謂神仙也。然圖其形多似鳥獸異物。物茂卿云。易有之艮為山為狗。為黔喙之屬。是其所繇象也乎。

又渡石橋曰三峽橋。所謂穹隆之懸磴。恐非人工所及。下臨萬丈之壑。杳冥無際。獨瞰喬木之巔耳。嵩呼髭摺。隙容身。因名云。乃登。上可坐十餘人。壁立萬仞如削。四顧呀然皆谷。杳失來路。仰則更有一石峯。階級絕矣。上置小祠。登者釣梯以攀。又有葛籠嵩蠟燭岩大黒岩冑岩螺嵩。峩然並峙。其餘小岩如龍孫之侍竹祖者。指不暇屈。大日嵩釋迦嶽仙人嶽弥陀嶽。重疊左右。早魃淫雨。皆祈於此。祈晴則大日嶽。祈雨則折三嶽之松枝以環其地。所環靈雨果注。土人謂此處。曰西奧院。靜夜或聞天樂之聲云。

〔訓読〕

又金洞山に上る。俗に中の嶽と号す。蓋し白雲山の中の嶽なり。十有余里の間、群峯嵩を層ね、かさ屈曲羊腸たり。路窄まりて並び行くべからず。細泉競ひ流る。其の声玉を憂つ。溪橋を度る。わた遙かに嵌空を望めば、形半月に似たり。諸戸村に過る。よま小幡侯の封邑なり。予の為に路を掃ひ、一小亭を設く。乃ち焉に憩ふ。鳥居下に至る。いにしへ古者、中の嶽の華表を此に立つ。因りて地名と為すと云ふ。蓋し我が邦の神祠、皆華表を置く。俗に之れを鳥居と謂ふ。遙かに東南を望めば、峯々聯互して波濤の如し。松井田驛を目の下に瞰す。回瞻すれば則ち荒舟山、其の形搏風の如し。故に一に搏風山と曰ふ。或は長棟と曰ふ。是れ毛信の界なり。甲と為す者は誤れり。

歩みて嵩高寺に到る。日本武尊の祠を拝し、大黒天祠、及び僧長清の墓に詣る。いた西のかた屨屨を拳がること数十仞、

雲を欲^すひ霧を歎^はき、半天に在るが如し。巔^{いたゞき}に天狗の祠有り。蓋し我が邦に所謂天狗なる者は、猶ほ彼中に所謂神仙のごときものなり。然れども其の形を図するに、多く鳥獸異物に似る。物茂卿云はく、易に之れ有り。艮を山と為し、狗と為し、黔喙の属と為す。是れ其の繇象する所なるか、と。

又た石橋を渡る。三峽橋と曰ふ。所謂穹隆の懸磴、恐らくは人功の及ぶ所に非ざらん。下は萬丈の壑に臨む。杳冥として際無し。独り喬木の巔を瞰すのみ。崑を髭摺^{ひげすり}と呼ぶ。隙に身を容^いる。因りて名づく^と云ふ。乃ち登る。上に十余人を坐せしむべし。壁立萬仞削るが如し。四顧すれば呀然として皆谷なり。杏として来路を失ふ。仰げは則ち更に一石峯有り。階級絶ゆ。上に小祠を置く。登る者は釣梯して以て攀づ。又た葛籠崑・蠟燭岩・大黒岩・冑岩・螺崑有り。峩然として並び峙つ。其の余の小岩、龍孫の竹祖に侍するが如くなる者は、指屈するに暇あらず。大日崑・釈迦嶽・仙人嶽・弥陀嶽、左右に重疊たり。早魃淫雨には、皆此に祈る。晴を祈るには則ち大日嶽、雨を祈るには則ち三嶽の松枝を折りて以て其の地を環^{めぐ}る。環る所靈雨果して注ぐ。土人此の処を謂ひて西奥の院と曰ふ。静夜には或は天楽の声を聞くと云ふ。

〔語釈〕

○俗号中嶽^{云々} 旭山「登金洞山記」に「俗呼^二中岳^一。聳^二其右^一者。為^二白雲山^一。左為^二金鷄^一。故有^二中岳之稱^一耳。」とあり、良齋「東省日録」に「入^二金洞山^一。山在^二白雲金鷄間^一。故俗称^二中岳^一。」とある。また、清水浜臣「上信日記」にも「こ（金洞山）は中のたけともいへり。白雲、金洞、金鷄のならびたてるが中になれば中のたけとはいふなりけり。」とある。○層崑 いわおをかさねる。また、かさなつたいわお。崑は巖に同じく、いわお。○羊腸 羊のはらわたのように、路が曲りくねっていること。○憂 憂の俗字。うつ。た、く。○嵌空 うつろ。空洞。○諸戸村 甘楽郡内の村名。○小幡侯 当時の小幡藩主は 松平忠恵公。○古者 むかし。○華表 中国で、墓所の前や、

城郭、役所等の入口に建てる門をいう。こゝでは、鳥居を中国風に表現したもの。○于此 この下の点は朱。○聯互 つらなりわたる。○如波濤 岑参「与高適薛昶同登慈恩寺浮图」詩に「連山若波濤」とある。○瞰 見おろす。○回瞻 ふりかえり見る。○荒舟山 荒船山。『上野名跡考』に「西牧信上の堺にありて尤高山也。其形屋宇の如なるを以て破風山といひ、又砥山ともいふ也。信濃にてはあら舟山といふ。船の南天に行に似たり。」とある。○搏風 屋根の切妻についている合掌形の裝飾板。破風。○甲 甲斐国。○嵩高寺 現在の中之嶽神社。『上野国志』には「巖高寺」として「菅原村の奥中の岳にあり、此山を金洞山と云、真言新義」とある。○詣 いたる。まうづ、と訓むのはよくないであろう。○僧長清之墓 長清は、巖高寺開山とされる伝説的人物。寛文元年、百四十八歳で没したという。長清法印。現在、中之岳神社裏手の山林の中に、その墓と伝えられるものが存する。○厩 山頂のけわしい所。○仞 両手を広げた長さで、周尺の八尺(または七尺)という。○欬 すう。○歎 ふく。はく。○半天 天のなかほど。中空。○巔 いたゞき。○彼中 唐土を、わが国に対していうものである。○凶 えがく。○異物 普通と異なった見なれないもの。怪しいもの。○物茂卿 荻生徂徠。茂卿は徂徠の字。物はその先が物部氏より出ていることによる。○易有之^{云々} 徂徠「天狗説」(『徂徠集』卷之十六所収)に「茂卿誓諸典籍。易有之。艮為山。為狗。為黔喙之属。是其所繇象耶。」とある。易は『易経』のことで、「艮為山^{云々}」は、その説卦伝第十一章に見える。○艮 六十四卦の一。○黔喙之属 黔喙はくちばしの黒い鳥。属は類。底本「黔喙之属」に作るのを誤写とみて改めた。○繇象 うらかたとして表す。○穹隆之懸磴 弓なりの石橋。孫綽「遊天台山賦」に「跨穹隆之懸磴、臨萬丈之絶冥。」とある。○人功 人間の事業。人のしわざ。○萬丈 非常に深いこと形容。○壑 たに。○杳冥 奥深くて暗い。○髭摺 旭山「登金洞山記」に「峰窮而石隙。々僅容^レ身。名曰^二磨鬚岩^一。」とあり、良齋『東省日録』には「大石如^二厦屋^一者。累累倚疊。其隙僅咫尺。躬躬若^レ不^レ容。曰^二磨鬚岩^一。」

脱_二雄刀_一。蝸附而出_二其上_一。」と言う。なお、斎藤竹堂「遊金洞山記」には「巨石倚疊。折裂不_レ合、若_二縫衣之綻_一、腹貼_レ石而出_二其背_一、鬚眉皆摩、曰_二摩鬚岩_一。」とあり、浜臣「上信日記」には「又よちのほりて大岩のめぐりを回りにて鬼の鬚すりといふ岩のもとにいつ。佩し太刀も何も大方身にそへたる物皆とりおきて、あかはたかにならぬはかりのほること二丈はかりにて岩のうへに出たり。」とある。○隙容身 「隙僅容身(隙、僅かに身を容る)」とある方が意が通じやすい。○壁立 壁のように垂直にきり立つ。○四顧 四方を見まわす。○呀然 谷などの空しいさま。韓愈「燕喜亭記」に「出者突然成_レ邱、陷者呀然成_レ谷。」とある。○杳 底本「杏」に作り、これを朱にて「杳」に訂している。○階級 階段。○釣梯 つりばしご、乃至はしごをつる、の意であろう。○峩然 けわしいさま。

○龍孫之侍竹祖 龍孫はたけのこの異名。竹祖はおやだけ。おやだけの周囲にたけのこが簇生するさまを「孫」と「祖」とにかけて擬人化した表現。楊萬里「都下食_レ筍自_二十一月_一至_二四月_一」戯題詩に「竹祖龍孫渭上居、供_二儂樽俎_一半年余。」とある。○重疊 いくえにもかさなる。○早魃 ひでり。○淫雨 大雨。降りすぎる雨。○所環 未詳。めぐっていると、の意か。○靈雨 不思議な力により降る雨。恵みの雨。○天樂 天上の妙なる音楽。

〔通釈〕

更に金洞山に上る。世間では、中の嶽と呼んでいる。思うに、白雲山の中の嶽という意味であろう。十何里かの間、多くの峯々や重なり合った巖石が並び立ち、路は羊の腸のように曲りくねっている。路幅はせばまり、並んで進むことが出来ない。さ、やかな清水が競うように流れている。その水音は、玉を撃ち鳴らすかのようなようだ。溪流にか、った橋を渡る。遙かに空洞の穴を眺めると、その形は半月に似ている。諸戸村にさしかかった。こゝは小幡侯の領地である。私の為に道路を清掃し、ちよつとした休憩所を設けてくれた。そこで、その休憩所で一休みした。鳥居下に着い

た。昔、中の嶽の華表をこゝに立てたことから、地名になった、ということである。思うに、わが国の神社では、皆、華表を設けている。世間ではこれを「鳥居」と言っている。遙かに東南の方角を眺めやると、峯々が連なりわたって、波のうねりのようである。こゝからは、松井田宿を眼下に見おろすことが出来る。首をめぐらして反対側を見ると、そこには荒舟山が有る。その形は搏風に似ている。それで一名を搏風山ともいう。又は、長棟ともいう。これは、上州と信州との国境である。甲州との境だと言うのは間違っている。

歩いて富高寺に着いた。日本武尊の祠に参拝し、大黒天の祠、及び僧長清の墓にも足を運んだ。西の方の、山頂の険しいところを数十仞上る。そこは、雲を吸い霧を吐いて呼吸をするような場所で、あたかも中空に浮かんでいるかのようだ。巔には天狗の祠が有る。思うに、わが国で天狗と呼んでいるものは、唐土で神仙と言っているものと同じものである。しかし、その姿を描いたものは、大概、鳥や獣に類したものになっている。荻生徂徠は、天狗に就いて「『易経』に記述がある。即ち、「艮を山とし、狗とし、くちばしの黒い鳥の仲間とする。」というものだ。これがその表しているものであろうか。」と言っている。

更に石橋を渡る。この橋を三峽橋と言っている。これは、所謂「穹隆の懸磴（高く弓なりに反った石橋）」であり、恐らくは、人間が作ろうとしても、作れるものではあるまい。下は萬丈の谷に臨み、谷底は暗く奥深くて底が無いかのようだ。たゞ高い木々の梢を見おろすばかりである。そのの嵒を髭摺と呼ぶ。隙間にやっと身体が入る。それでそういう名がついたのだということだ。その嵒に登った。嵒の上は、十人余りを坐らせることが出来る程の広さである。萬仞の高さで、壁のように切り立った巖壁は、あたかも削って作ったかのようなものである。四方を見まわすと、全て深々とした谷である。どこから上って来たのか、分らなくなってしまう。ふり仰ぐと、更に、もう一つ、石の峯が有った。登るべき石段は途切れている。その上には小さな祠が有る。登る者は、釣り梯子で攀じ上るのである。また、葛

籠崑・蠟燭岩・大黒岩・冑岩・螺崑といった岩々が有つて、険しく並び峙っている。その他の小さな岩で、筍が親竹に仕えているような恰好をしたものは、数えきれない程多い。大日崑・釈迦嶽・仙人嶽・弥陀嶽といった山々が、左右に重なり合っている。早魃ひでりや大雨の時には、皆、こゝで祈願をする。晴天になるように祈るのならば大日嶽に行く。雨乞いならば、三つの嶽の松の枝を折つて、その場所をめぐるのである。めぐっていると、きつと雨が降ってくる。土地の者は、こゝを西奥の院と呼ぶ。静かな夜には、時として、天人の奏でる妙なる音楽を聞くことがある、という。

四、石門巡り

又還崑高寺。予嘗聞東奥院有石門四。其三四門。皆得之于傳聞。而登觀者尠矣。因謀諸住僧。僧曰。僕従多則險路不便。因呼導者。省扈従而行。路果險危。蔓草毎々似無人跡。仰則第一門。全石天成。不假人工。竦立數千仞。愕然駭目。雖高且大。而使人鞠躬如不容。

又分草而行。路頗險。或高或低或曲或直。幽藹冥漠。邃如曠如。行數千步。遙望山間有門形。是為第二門。所謂畏途不可攀也。左則辨天崑。鬱而峯聳。乃環而行。路愈險。壑愈幽。沙石滿徑。錯落如碁子。觸足即散。為之失脚。欲墜者數矣。扳蘿捫葛。猿懸而行。山蛭點々自樹梢落。徑窮。懸崖百餘丈。不可下以帶連結。縋而下。則有溪欄路。左顧一穴豁開。乃入其中。廣於維摩室。是為第三門。

出門綠樹交加。日光罕照。度水履石。到第四門。憇于其傍。一面遠山疊累。一山巋然。如野鶴之立鷄羣者。是為稻含山。三面巨崑林立。如鋸解刀削。一二門亦在目下。凡人之所傳說。皆名浮其實。唯此第四門。愈于所聞。往者經歷東海中山二道。觀寢覺崑屋塩尻清見薩埵之勝。自謂天下無復此奇觀。何思有此大觀。近在封域之内。所謂失之目睫者。非耶。為之粲然。

自寺至此十有餘里。路險頗移晷。徒徒皆渴。於是傾瓢俱酌。勞則勞矣。然而非如世路之艱難。與官途之辛苦也。一生好入名山遊。酒仙翁豈欺我哉。又問前途。則曰詰小屋。猶欲前行。日既過午。乃還第一門。路稍平坦。崑坳有水一泓。聞雖旱不涸。俗名曰菅公硯水。蓋以尊意為菅公之師為此妄說耳。還吉澤亭。午飯可鼓餘勇。

〔訓読〕

又た崑高寺に還る。予嘗て聞く、東奥の院に石門四有り。其の三四門は、皆之れを伝聞に得て、登觀する者は尠し、と。因りて諸を住僧に謀るに、僧曰はく、僕從多ければ則ち險路便ならず、と。因りて導者を呼び、扈從を省きて行く。路果して險危なり。蔓草毎々として人跡無きに似たり。仰げば則ち第一門なり。全石天成にして、人工を仮らず。竦立すること数十仞、愕然として目を駭かす。高く且つ大なりと雖も、人をして鞠躬して容れられざるが如くならしむ。

又た草を分けて行く。路頗る險し。或は高く或は低し。或は曲り或は直なり。幽藹冥漠として、邃如たり、曠如たり。行くこと数千歩、遙かに山間に門の形有るを望む。是を第二門と為す。所謂畏途攀づべからざるなり。左すれば則ち辨天崑。鬱として岩窅たり。乃ち環りて行く。路は愈々險しく、壑は愈々幽かなり。沙石徑に満ち、錯落すること碁子を布くが如し。足に触るれば即ち散る。之れが為に脚を失ひて墜ちんと欲する者数なり。蘿を抜き葛を捫り、猿懸して行く。山蛭点々として樹梢より落つ。徑窮まる。懸崖百余丈。下るべからず。帯を以て連結し、縋りて下る。則ち溪欄の路有り。左のかたを顧みれば、一穴豁開す。乃ち其の中に入る。維摩の室よりも広し。是を第三門と為す。門を出づれば緑樹交々加はり、日光罕に照らす。水を度り石を履み、第四門に到る。其の傍らに憩ふ。一面は遠山疊累す。一山巋然として、野鶴の鷄羣に立つが如くなる者は、是を稻含山と為す。三面は巨崑林立し、鋸にて鮮き刀にて削りたるが如し。一二門も亦た目の下に在り。凡そ人の伝説する所、皆名其の実に浮ぐ。唯だ此の第四門のみ聞

く所に愈まされり。往者東海・中山二道を経歴し、寢覺の崑屋・塩尻・清見・薩埵の勝を觀、自ら天下に復た此の奇觀無しと謂おもひき。何ぞ思はんや、此の大觀、近く封域の内に在ること有らんとは。所謂之れを目睫に失ふ者に非ずや。之れが為に粲然たり。

寺より此に至るまで十有余里。路險しくして頗る暑とぎを移す。徒徒皆渴く。是に於いて瓢を傾け俱に酌む。勞は則ち勞なり。然り而して世路の艱難と官途の辛苦との如きに非ざるなり。一生名山に入りて遊ぶを好む。酒仙翁豈に我を欺かんや。又た前途を問へば、則ち詰の小屋と曰ふ。猶ほ前行せんと欲すれども、日既に午を過ぐ。乃ち第一門に還る。路は稍平坦なり。崑坳に水一泓有り。聞くならく、早と雖も涸れず。俗に名づけて菅公の硯水と曰ふ、と。蓋し尊意菅公の師たるを以て、此の妄説を為せしのみ。吉沢亭に還る。午飯余勇を鼓すべし。

〔語釈〕

○又 底本「又」に作るのを朱にて「又」に訂す。○尠 すくない。○導者 道案内人。巖高寺に石門巡りの道案内をする者の居たことは、旭山「石門記」や良齋『東省日録』などにも見えている。○毎々 草がさかんに生えるさま。○竦立 そびえ立つ。○愕然 おどろいたさま。○駭 底本「駭」に作るのを誤字とみて改めた。駭は、おどろかす。○鞠躬如不容 鞠躬は身をかゞめること。『論語』郷党に「入二公門一、鞠躬如也。如レ不容。」とある。○幽藹 おくふかいさま。また、うす暗いさま。○冥漠 くらくて見えない。遠くてはつきりしない。○邃如 ふかいさま。また、遠いさま。○曠如 ひろくしたさま。○畏途不可攀 畏途は險阻で畏るべき道路。李白「蜀道難」詩に「畏途巖巖不可攀。」とある。○鬱 こんもりしげるさま。○岩崕 山の高いさま。底本「岩崕」に作るのを誤写とみて改めた。○錯落 ちりしく。○碁子 碁石。○扳蘿捫葛 「扳」は、引く、引っぱる。「捫」は、とる、つかむ。蘿（つたかずら）や葛などに取りつき、たぐり寄せながら進むのである。良齋『東省日録』に「扳レ

葛入レ谷。捫レ蘿陟レ崖。」とある。○猿懸 猿のようにつり下がる。○懸崖 断崖。○溪欄路 未詳。溪沿いの路の意か。○豁開 ひらく。○維摩室 維摩は『維摩經』の主人公で、釈迦時代天竺の毘舍離城に住んでいた大富豪という。その居室は一丈四方であったと伝えられている。○緑樹交加 歐陽脩「豊楽亭春遊」詩に「緑樹交加山鳥啼」とある。交加は、入りまじる。○履 ふむ。○疊累 重なり合う。○巋然 高くけわしいさま。また、独立のさま。○如野鶴之立鷄羣 衆中に独り傑出している喩え。『晋書』嵇紹伝に「昂々然如野鶴之在鷄羣」とある。○解 解の俗字。きりさく。さきわけ。○名 評判。「実」に対する。○浮 すぎる。まさる。○愈 まさる。○往者^{云々} 往者は、かつて。こゝは、天保五年及び六年、大坂加番のため西征、東還した時のことを言っている。○寢覚^{云々} 信濃国木曾郡にある奇勝。木曾川の侵食によって出来た。『西征紀行』に「至寢覚邑。有禪寺」。曰臨川。建寺岸上。眼下断崖疊疊。岩石之美。奇怪天成。」とある。○塩尻 塩尻峠。信濃国にあり、諏訪盆地と松本盆地との境界をなす。『西征紀行』に「上塩尻嶺。自中央顧後。鷲湖渺渺。湖上富嶽挿天。」とある。○清見 清見潟。駿河国の景勝地。清見寺がある。○薩埵 薩埵峠。駿河国にある。『東還紀行』に「越薩埵嶺。数十里間。左山右海。海色山光。青碧相映。」とある。○勝 景色のすぐれた地。名勝。○謂 おもう。○大観 壮大ですばらしいながめ。○封域 領地。○失之目睫 目とまつげのように非常に近い距離にあるにもかかわらず、また、それ故に、気づかなかつたりすること。燈台下暗し。○粲然 白い歯を出してにこやかに笑うさま。○移晷 時間が経過する。○瓢 ひさし。○勞則勞矣^{云々} このあたり、節山の感懐が吐露されていて、『白雲山記』一篇の眼目と言ってもよいであろう。君臣和楽のさまも、また、目に浮ぶようである。○世路之艱 白居易「初入太行路」詩に「若比世路難。猶自平如掌」とある。○一生好入名山遊 李白「廬山謠 寄盧侍御虛舟」詩中の一句。○酒仙翁 李白の号。○崑坳 岩のくぼみ。○泓 水たまり。○菅公硯水 奈佐勝皐「山吹日記」に「道け

はしきをゆけは、右に石の横つかたより清水なかる、を、こ、なる人は、菅公の手ならひし給ひし硯水といふに、遙かにいしのおもてを這のほりてみれば、三四寸はかりのあなうけたるよりした、りつ、たえ／＼になかるれと、いかなる日の照つ、きたる時も、かる、ことなしとそ。」とある。○尊意為菅公之師 尊意と道真との関係は、所謂、柘榴天神の説話などによってよく知られている。○可鼓餘勇 餘勇は、本来、餘った勇氣、又、十二分にある勇氣の意で、「餘勇可買」（こちらには餘った勇氣があるから勇を欲するものは、その餘勇を買いとるのがよい、との意。『左伝』に基づく。）など、使われるが、こ、では、残った元気を鼓舞して、もう一頑張りしよう、との意であろう。

〔通釈〕

また嵩高寺に戻った。私が以前聞いたところでは、東奥の院には、石門が四つ有る。その内の、第三門と第四門とは、ともに、これを話に聞くだけで、自分で登って観る者は少い、ということだ。そこで、このことを嵩高寺の住僧に相談してみると、僧は「従者が多いと、険しい路は却って不便です。」と言う。それで、道案内人呼び、家来たちを少しだけ連れて行くことにした。路はやはり、険しく危ういものであった。蔓草が生い茂って、人の通った跡など無いかのようである。ふり仰ぐと、そこが第一門であった。石門全体が天然に出来たもので、人の手を加えた所は無い。数十仞の高さにそびえ立ち、ぎよつと人の目を驚かす。高く大きいけれども、（畏敬の念の余り）人に身をかゞめさせて、その門に入ることが許されないかのような気持ちを抱かせるものである。

更に草を分けて進んで行く。路はとても険しい。高くなったり低くなったり、曲ったり真直ぐだったりする。奥深くほの暗く、深々と、また、広々としている。数千歩行ったところ、遠く山の間門の形の有るのが認められた。これが第二門である。これは、李白の言う「畏途攀楮べからざる（険阻で攀じ登ることが出来ない）」ものである。左に行くとは辨天崑が、こんもりと高くそびえ立っている。そこで、これを迂回して行く。路はいよ／＼険しくなり、谷は

いよ／＼奥深くなる。砂や石ころが径こみちにいっぱい、まるで基石を敷きならべたかのように散り敷いている。足が触れると直ぐさま散り碎ける。この為、足をすべらせて谷底へ転落しそうになることが何度もあった。蘿を引っぱり、葛をつかみ、猿のように岩場にぶら下って進む。山蛭がぼた／＼と木の梢から落ちて来る。径が行き止まりになった。百丈余りの断崖で、下りることが出来ない。帯を結び合わせ、それに取りすがって下った。すると溪欄の路が有った。左の方をふり向くと、一つの穴がぼっかりと口を開けている。そこで、その中に入ってみたところ、維摩居士が住んでいたという方丈の室よりも広い。これが第三門である。

第三門から出ると、緑の木々が次々と増えて来て、日の光は僅かしか射さない。溪川を渡り石を踏み、第四門に着いた。その近くで休憩する。こゝから眺めると、一方は、遠く山々が重なり合っていて、その中に、一つの山がすくとして、あたかも、鶴が一羽、鶏の群れの中に混じっているかのような姿なのは、稻含山である。他の三方は、巨嶺が林立し、鋸で引き切り刀で削ったかのようなのである。第一門、第二門も、また眼下に在る。一般に、人が言い伝えることは、皆、評判の方がその実際以上に大げさになっているものである。しかし、たゞこの第四門だけは、聞いていたことにまさってすばらしい。以前、東海道と中山道とを旅し、寢覚の崑屋・塩尻峠・清見瀉・薩埵峠といった勝景の地を見て、世の中に、こんな奇観はまたと無いだろう、と思った。このようすばらしい景観が、近くわが領内にあらうとは、思いもよらないことであった。これこそ世に言う「これを目睫に失する（直ぐ近くの物を見つけれない）」というものではなからうか。そう思うと、思わず笑みがこぼれた。

崑高寺からこゝまでは十里余りの道のりだが、路が険しくて、随分と時間が経ってしまった。家来たちも、皆、咽が渴いたようだ。そこで瓢箪を傾けて、ともに飲んだ。こうした山登りは、苦勞ほねわりなことは確かに苦勞ほねわりである。しかし、その苦しさは、世渡りの為の苦しみや、出世の為のつらさといったものとは、別なものである。酒仙翁（李白）は、

「一生、名高い山に分け入って遊んで過ごしたい。」と言ったが、酒仙翁が私を欺すわけがない。更に前途を尋ねると、(道案内人は)「詰の小屋です。」と言う。なおも進んで行きたかったけれど、もはや時刻は午の刻を過ぎて^{ひでり}いる。そこで第一門に戻った。路は幾分平らかである。嵩のくぼみに水がたまっている所があった。聞いてみると、早であつても涸れることがなく、人々は、菅公の硯水と呼んでいる、ということだ。思うに、(妙義祠に祀られているとされる)尊意が菅公(菅原道真)の師匠であつたことから、こうした出鱈目を言い出したまのであろう。吉沢亭に帰つて来た。昼食を喫して元気を出し、もう一頑張りしよう。

五、白雲山登攀、帰城

又登白雲山。溪水傍注。琮瑋如琴筑。頑石横徑。呼犬戾石。言犬亦不能登也。試登則高嵩相對。其間僅通人。遶行山腹。澗水極淨。掬以醫渴。又登颯隙。去天尺五。奇嵩突起如卓筆名曰天狗御所。有池深而清。行數步。又有洞窟。乃入歷級而登。中置一龕有窟。是窟中之窟也。其窟口有鐵鍵援之以攀。則有十一面觀音石像。窟中滴瀝點々。窪處泓而瀦焉。是為妙義奧院。蓋凡名山置神祠佛堂。必就其奧陬。別設祠堂。謂之奧院。猶離宮別館也。導者曰。不可深入。々々則滴瀝如雨。乃止。

初登日猶高矣。慮不及燭。陰雲俄布。歸途冥々。降數千步。至大字幣下。已而日暮。雨霏々不辨物色。懸崖路窮。亦猿貫而降焉。忽見火光閃樹間。奴僕提燈來迎也。憇于天狗堂。過殿閣觀古器物。自松井田驛馳馬入城。時已五更。

〔訓読〕

又た白雲山に登る。溪水傍らに注ぐ。琮瑋として琴筑の如し。頑石徑に横たはる。犬戾石と呼ぶ。言ふこゝろは犬も亦た登る能はざるなり。試みに登れば則ち高嵩相對し、其の間僅かに人を通す。山腹を遶り行く。澗水極めて淨し。

掬して以て渴を医す。又た甌隙に登る。天を去ること尺五。奇崑突起すること筆を卓てたるが如し。名づけて天狗の御所と曰ふ。池有り。深くして清し。行くこと数歩。又た洞窟有り。乃ち入り、級を歴て登る。中に一龕を置く。窟有り。是れ窟中の窟なり。其の窟口に鉄鍵有り。之れを援きて以て攀づれば、則ち十一面観音の石像有り。窟中滴瀝すること点々たり。窪処は泓くして瀦る。是を妙義の奥の院と為す。蓋し凡そ名山に神祠仏堂を置けば、必ず其の奥陬に就きて、別に祠堂を設け、之れを奥の院と謂ふ。猶ほ離宮別館のごとくなり。導者曰はく、深く入るべからず。深く入れば則ち滴瀝すること雨の如し、と。乃ち止む。

初め登りしとき日猶ほ高かりき。慮、燭に及ばず。陰雲俄かに布き、帰途冥々たり。降ること数千歩、大字幣の下に至る。已にして日暮る。雨霏々として物色を辨ぜず。懸崖路窮まる。亦た猿貫して降る。忽ち火光の樹間に閃めくを見る。奴僕燈を提げて来り迎ふるなり。天狗堂に憩ふ。殿閣に過り古器物を観る。松井田駅より馬を馳せて城に入る。時已に五更。

〔語釈〕

○琮瑋 泉流の音。○琴筑 琴と筑と。何れも弦楽器。○頑石 かたくな、石。邪魔な石をけなして言ったもの。
○山腹 底本「山復」に作るのを誤写とみて改めた。○澗水 谷川の水。○医 いやす。○甌隙 こしきを重ねたような形の岩山。○去天尺五 天から一尺五寸離れている、の意で、甚だ天に近いことを言う。『辛氏三秦記』に「城南韋杜、去天尺五」とある。○卓 たてる。○級 階段。○龕 佛龕。厨子。○援 ひく。ひきよせる。○滴瀝 しずくがしたる。○泓 水が深い。○瀦 水がたまる。○奥陬 奥まった所。○離宮 天子の別邸。○陰雲 あまぐも。○布 しく。ひろがる。○冥々 くらいさま。○物色 物の形や色。○猿貫 未詳。猿懸、又は魚貫の意か。仮に、猿懸と同意に解しておく。○城 安中城。○五更 更は日没から日出までを五等分した時間

の単位で、五更はその五番目。寅の刻に当り、もはや明け方近い。松井田宿から馬を走らせたにしては、聊か時間がかり過ぎていようにも思われる。

〔通釈〕

更に白雲山に登る。溪川が脇を流れている。さら／＼という音は、琴や筑をかき鳴らしているかのようだ。邪魔な石が径に横たわっている。これを、犬屎石と呼んでいる。犬もその石に登ることが出来ない、という意味である。試みに登ってみると、高い崑が向き合っていて、その間を、やつと人が通ることが出来る。山腹を迂回して進む。溪川の水はとても清らかである。手にすくって咽をうるおした。更にこしきを重ねたような形をした岩山に登る。天からいくばくも離れていないと感じられる程高い。不思議な形の崑が、筆を突き立てたかのように突き出ている。こゝを名づけて、天狗の御所という。こゝには池があり、その水は深く清らかである。数歩進むと、また洞窟が有った。そこで、その中に入り、階段を上る。中には厨子が安置してある。更に洞窟がある。これは洞窟の中の洞窟である。その洞窟の入口には鉄の鍵が有り、それをたぐって攀じ上ったところ、十一面観音の石像が有った。洞窟の中は、水滴がひた／＼とした、っている。窪みには深く水がたまっている。これが妙義の奥の院である。思うに、名高い山に神社や佛堂を設けると、必ずその奥まった所に、別に祠堂を設置し、これを奥の院と言っているが、これは、（人間で言えば）丁度、離宮や別館といったものに当るものであろう。道案内人が言う。「奥深く入ってはいけません。奥深く入ると、滴が雨のようにひどうございます。」それで、それ以上進むのを止めた。

登り始めた時は、日がまだ高かったので、燈火のことまでは考えに入れていなかった。ところが、雨雲が急に空を覆ってきて、帰り道は真暗になってしまった。数千歩下って、幣帛で作った「大」の字の下に着いた。もはや日も暮れてしまった。雨は激しく降って、物のあやめも分らない。絶壁で路が行きどまりになった。またも、猿のようにぶらさ

がつて下りる。すると、突然、火の光が樹木の間いきらめくのが見えた。(それは、)下僕が提燈を持って迎えに来たのであった。天狗堂で休憩し、殿閣に立ち寄って、古い器物を見た。松井田宿から馬をとばして、安中城に帰った。時刻はすでに五更になっていた。

〔附記〕 貴重な御蔵書の翻刻(註解本文としての使用)を許可せられた静嘉堂文庫に御礼申し上げる。